

マッシュ^な料理人が送る、 異世界のんびり生活。

～強面、筋骨隆々、非常に強い。

でもとっても優しい男が異世界でほのぼの暮らすお話～

2

著 かむら

絵 日下コウ



登場人物紹介

アンネリーゼ

「蒼天の風」所属の魔法使い。
人から褒められるのが好き。

キリカ

「蒼天の風」所属の
受付嬢。ギルドの
ムードメーカー。

ソフィア

異世界の創造神。
シュージのことを
気にかけている。

ジルバート

「蒼天の風」のギルドマ
スター。圧倒的な戦闘
能力を誇る。

シュミット

辺境伯家の令嬢。少女
ながらも大人びている。

シュージ

日本から異世界に転移した、
とっても強くて、とっても優しい
マッチョ。転移前は料理人をして
いたため、冒険者ギルド
「蒼天の風」に料理番として
雇われる。

ルビィ

王国の第三王女。
引っ込み思案な
タイプ。

身長190センチ、筋骨隆々きんこつたつらつらという厳いかついで見た目をした男、館野秀治たかのしゅうじ——シュージは、ある日突然異世界へと飛ばされてしまった。

そこは、魔物や魔法が存在する不思議な世界。

シュージは転移後すぐに、獐じちゅう猛な狼の姿をした魔物に襲われていた少年たちを助ける。

どうやら、彼らはリック、カイン、メイという名前で、魔物を倒すことが仕事の冒険者という職業に就いているとのことだった。

そんな彼らに、助けたお礼に所属する冒険者ギルド、蒼天そうてんの風へと招かれる。

行くあてがなかったシュージは蒼天の風のギルドマスター、ジルバートに用務員として雇ってもらい、そこで沢山の仲間と出会うこととなった。

用務員の仕事の中にはシュージが得意な料理が含まれているのだが、異世界の食文化はあまり発達していないかった。

そこで、地球ではアマチュア格闘家でありながら、街の小さな食堂で料理人として働いていたシュージは、その腕を振るって蒼天の風の仲間を驚かせる美味しい料理を作ったり、その作り方を教えたりしていく。

その結果、シュージの作る美味しい料理は、蒼天の風のメンバーだけではなく、様々な異世界人に影響を及ぼし始めた。

名のある商人から貴族まで、料理の虜とらになった者達と新たな縁を結んだシュージの異世界生活は、日を追うごとに充実したものへと変わっていった。

そうして用務員生活を送っていたある日、蒼天の風があるヤタサの街に、スタンピードの脅威が迫っているという知らせが入る。

スタンピードとは、本来外に出られないはずの危険な魔物がダンジョンの外に溢あふれ返り、人々を襲うという、この世界における大災害の1つだ。

蒼天の風は、もちろんこの災害を食い止めるべく行動を始め、シュージも自分にできることをしようとして動き出すのであった。

第1話 スタンピード、襲来

——カランカランカラン！

ある日の早朝。

街中に響く大きな鐘の音でシュージは目を覚ました。

この音が鳴るということをあらかじめ聞いてはいたものの、本当に鳴ると結構驚くものである。急いでベッドを出て、着替えてエントランスまで降りると、蒼天の風の他のメンバー達も続々と集まっていた。

ただ、いつもと違い、皆んな表情が真剣で、武器や防具を身に着けている。

「よし、戦闘員は揃そろったな。これより、スタンピードの迎撃に向かう」

そう、先程の鐘の音は、近くのダンジョンでスタンピードが発生したことを知らせるものだった。集まった面々を見て、ギルドマスターである美麗な男性、シルバートが口を開く。

「今回のスタンピードは前回と同じぐらいの規模だ。スタンピードの戦いに参加したことのない、ガル、シャロ、ピュイ、アンネリーゼは今回パーティーを組み、離れずにお互いをカバーして戦うこと」

「[[[[はー]]]]」

ジルバートの指示に、ガル、シャロ、ピユイ、アンネリーゼは真剣な様子で返事をした。

「前衛の俺、ボリー、ジンバ、ミノリは最前線で魔物をできるだけ多く止めて倒す。他のメンバーは前線のカバーをしつつ、他のギルドや衛兵のカバーも頼む」
 ベテランメンバー達は少し余裕を感じさせる表情で頷いた。

「皆さん、お気を付けて。帰りを待っています」

ジルバートの言葉を引き継ぐ形で、シュージは皆の無事を祈った。

「あ、そうだ、オヤジ！ アレできてたよな？」

「む？ おお、そうじゃった。こういう時に使ってもらわんとな」

そんな中、鍛冶師のミノリとジンバがそう言っつて、鍛冶場の方へ走っていき、大きな箱を持って戻ってきた。

「はいこれ！ シュージの装備！」

「えっ、僕のですか？」

その箱には、金属製の装備が色々が入っていた。

「前に話しただろ？ 今回のスタンピードに合わせて完成させておいたよ！ ほら、着けてみて！」
 ミノリに言われるがまま、シュージは手渡された装備を身につけていく。

胸当てに肘当て、膝当てを着け、頭にはヘッドギアのような兜、そして手にはゴツゴツとした手甲を装備し、ぐっぐつと手を握ったり、屈伸をしたりする。

「どう？」

「いや、凄いですね。しっかりとした素材なのに、とても柔軟性があつて動きやすいです」

「それは良かった！ うんうん、似合ってるね！ 装備の隙間から見える筋肉もたまらないよ！」
 製作者であるミノリも、しっかりと装備を着こなしているシュージを見てご満悦だ。

「シュージ、その装備にはいくつか魔法が組み込まれとる。主にお前さんの動きを助けてくれるものじゃ」

共同製作者のジンバが、装備の説明をしてくれた。

「こんな立派なものを……ありがとうございます」

「いいんじゃないよ。使わんに越したことはないが、もし使う時が来たら、躊躇わずに使っとくれ」
 「分かりました」

ありがたい貰い物に、シュージは温かい気持ちになった。

「よし、では戦闘員は行くぞ！ この街を、ギルドを守るんだ！」

「『おおー……』」

そうして、士気を上げるジルバートの号令と共に、戦闘員達は駆け足で防壁の方へと向かっていった。

「さて、私達も行きましょうか」

残った後方支援組は、ギルドの受付兼事務員であるキリカの指示に従う手筈となっており、各々

の役割を確認していく。

「打ち合わせ通り、私は対策本部の方で補助などを。シドさんはアイテムの整備と足りなくなったものの生産。リックとカインはアイテムの運搬や防衛設備の点検。メイちゃんは回復魔法で怪我人などの治療。シュージさんは防壁近くの炊き出し所で食事のサポートですね。もし何か解決できない問題があった時は対策本部に来てください。では、私達も私達の戦いを頑張らしましょう！」

「[[[[はいつー]]]]」

こうして、ヤタサの街のスタンピード防衛戦が始まるのであった。



——キーン！ ガンッ！

至る所で戦闘音が轟いている。

ここはヤタサの街とダンジョンがある森との中間に位置する、なだらかな丘の上。

そこでは数千にも上る夥しい数の魔物と、ヤタサの街で活動している冒険者や衛兵達が戦っていた。

一見、数では魔物の方が多く有利に見えるが、実際のところは人間側の方が魔物達を少しずつ押し返していた。

そんな戦線で一番魔物が集まる場所で、一際凄い働きをする者達がいた。

「ギャウギャウ！」

「……ふんっ！」

まずは一番先頭で、2メートル近くあろうかという身長と同じくらいの大さを誇る大盾を振り回しながら、これまた大きな剣で向かってきた魔物を纏めて薙ぎ倒す、シュージと同じく若いごつい男性——ボリーがいた。

スタンピードの魔物は決して弱くない。

ゴブリンの上位種であるホブゴブリンや、オーク、オーガ、ウルフ系統など、並の冒険者では1匹相手取れば十分な魔物達なのだが、ボリーは自分が受け持つ範囲の魔物を一切後方に抜けさせていなかった。

「ボリー、ナイス足止め！」

そんなボリーの前で二の足を踏む魔物達の頭上に、カグラの手によって数枚の紙がシュツと放たれる。

次の瞬間、その紙から全てを燃やし尽くす炎や、全てを切り裂く風の刃、挙げ句の果てにはいくつもの稲妻が発生し、魔物達を一気に蹂躪していった。

「お〜。流石はアンネリーゼの魔法やね〜。今回用に魔法込めてもらってよかったわ〜」

「……援護、感謝」

「ええよええよ〜」

「ボリーさん、バフをかけ直しますね。『フィジカルブースト』」

近くには僧侶服の女性——グレースがいて、ボリーをはじめとした周りの者達に、臂力を上げる支援魔法をかけたたり、回復魔法を飛ばしたりしている。

たとえ傷ついてもすぐに復活するという、魔物達からしたら悪夢のような状況になっていた。

「……グレースも、感謝」

「いえいえ。ボリーさんがいてくれて初めて私達後衛が動けますから」

「おりゃあああ!!」

「ぬんっ!!」

さらにそのすぐ横では、ミノリが打撃面の大きな大槌を振り回して魔物を吹き飛ばし、ジンバがこれまた大きな斧を振り回して魔物を一刀両断していた。

「オヤジ、無理してないか!」

「馬鹿野郎、まだまだ若いもんには負けん。ミノリ、素材のためにも、もっと倒すぞ」

「ああ、任せなよ!」

スタンピードでは、魔物の素材は当然倒した者が受け取れるので、2人は自分達の仕事のためにも張り切っていた。

「よし、頼むよ、ミニャ」

そんな戦場から50メートルほど上空。

本来の大きさに戻ったカラスのような巨大な鳥——ジャイアントクロウのナイルの背に主人のゾラ、その従魔のミニャ、そしてギルドメンバーで学者の女性——イザベラが乗っていた。

「にゃー!」

ミニャの鳴き声と共に、モヤモヤとした霧のようなものが魔物を中心に発生した。

「……ギャ? ……!! ガアアアッ!」

「おお、流石ヒプノスキヤットの催眠魔法は強力だねえ。同士討ちしてるよ」

魔物の一部がミニャの催眠魔法によって同士討ちを始め、魔物の統率が崩れたのを見て、イザベラが感嘆するような声を上げた。

「ナイル、今のうちだ」

「ガア」

さらにそこへ、ナイルが硬質化させた羽を雨のように降らせていく。

結果、その辺り一帯の魔物は地に伏していった。

「ナイルもやるねえ」

「イザベラは何もしないのかい?」

ゾラの疑問にイザベラが答える。

そんな風に、蒼天の風のメンバーが最前線で活躍する中、横の戦線では……

——ズバズバズバズバ!

たった1人の男によって千に近い魔物が斬り伏せられていた。

「あれが、蒼天……」

「すげえ……次元が違い過ぎるだろ……」

そこに配置された者達の視線の先には、美しい蒼色の剣に風魔法を纏わせて魔物を一太刀で斬りながら、とてつもない速さで戦場を駆け回るジルバートの姿があった。

元々、蒼天の風というギルド名は、ジルバートの二つ名である「蒼天」から来ていて、その強さは世界で並ぶ者を見つけることが困難なほどだ。

実際、二つ名がつくほどの冒険者は、世界に両手で数えられるほどしかおらず、総じて何かしらの功績を残した者ばかりだ。

ジルバートも、若くして災害級の魔物を単独で討伐したり、未踏破のダンジョンをいくつも攻略したりと、功績を挙げればキリがない。

「この辺りは粗方片付いたか。……それにしても、久方ぶりに暴れると腹が減る。早く終わらせてシュージの飯にありつこう」

そんな彼も、今となつてはシュージのご飯に魅了された者の1人で、普段あまり態度には出さないものの、毎食楽しみにしていたりする。

そうして、その後も蒼天の風のメンバーは、とんでもない強さを見せつけながら戦場を駆け抜けていくのであった。

第2話 それぞれのできること

「ふう、こんな感じですかね」

「いやー、助かったよお兄さん!」

ヤタサの街の防壁近くでは、炊き出しをするためのテントの設営が行われていて、シュージはその手伝いをしていた。

この場に居るのはシュージ以外ほとんどが女性や子供で、話を聞くと冒険者や衛兵達の家族や妻子供達だそうだった。

そんな状況なので力のあるテント設営に難儀していたのだが、シュージが来てからはすぐにテント設営が終わった。

「では、集まってもらってもいいですか?」

そしてこの場合は、キリカが推薦したためシュージが取り仕切る手筈になっている。

一先ずシュージはこの場に居る人達を集めた。

「今回、炊き出し所の担当になりました、蒼天の風で働くシュージと申します。これから作るもの

の説明をしますので、見ていてください」

炊き出し所には違和感のある厳つい風貌をしたシュージだったが、冒険者や衛兵の身内なだけあってそのような風貌にも慣れていいのか、周りの女性陣はむしろ頼りになる男がいてくれて幸運ぐらいに思っていた。

「今回作るのは手早く食べられてお腹に溜まるおにぎりと言汁という料理になります。おにぎりの方は皆さんご存じかもしれませんが、豚汁はご存じないと思うので、これから僕が作りますね」

スタンピードは数日にわたって続く災害ということもあって、ローテーションを組んで戦うことになっている。

なので、これからひっきりなしに炊き出し所には人が来るのが予想され、作るのに手間のかかる料理や、食べにくい料理は好まれないだろうとシュージは考えた。

片手で食べられるおにぎりと、汁物だが具材を沢山入れれば満足感のある豚汁を作ることにしたのだ。

「まず、この大鍋に油を引いて、オーク肉、ツインポテト、ニードルキャロット、あとこちらのユキゴボウという食材を炒めていきます」

今回、豚汁を作るということは事前に伝えており、必要な食材はマルウとメルウが営むケットシー商會を通じて大量に仕入れた。

その中には、以前知り合ったズズムとハナエのような農家が育てた野菜なども含まれている。

この街の色んな人が今回のスタンピードの収束に向けて協力しているのだと思うと、何だか誇らしい気分になるシュージだった。

「この野菜と肉に粗方火が通ったら、水とこちらの粉をこれぐらい入れてください」

「その粉は何ですか？」

「これは僕が作った、色んな食材の旨味を抽出した出汁というものを粉状にしたものです。今度、商會で売り出すそうなので、今回食べてみて気に入ったらぜひ使ってみてください」

図らずも宣伝のようになったが、以前からシュージが使っていた顆粒出汁の生産体制がようやく整ったようで、近いうちに売り出すとケットシー商會のマルウとメルウから聞いていた。

シュージもこれまでは時間をかけて手作りしていたが、試作品を確かめてみたところ、シュージが作ったものと大差なかったたので、これからはそちらを買うつもりだ。

「水が煮立ってきたら少しアクが出ますから、それを取って、蓋をして10分ほど煮ていきます」

あまり料理に自信のない人もいたようだが、豚汁の簡単な料理手順を聞いて、これなら大丈夫そうだと胸を撫で下ろしていた。

「そして、最後にこちらの味噌を溶き入れて完成です。皆さん朝ごはんはまだですよ？ 良ければ食べてみてください」

早朝の呼び出しということもあり、朝ごはんはこれからのようだったので、シュージは一人一人に豚汁をよそって提供していった。

「おお、美味しいね！」

「優しい味わいです！」

「具も沢山ありますから、これだけでも十分なくらいです」

豚汁を初めて食べる女性陣にもお墨付きをもらえ、その後はおにぎりについても説明していく。

今回はおおか、昆布を混ぜ込んだおにぎり、そしてシンプルな塩おにぎりの3種類を作る。

ライスを大量に用意したので、おかわりは自由にする予定だ。

これで各自、自分の食べる量を調節できるだろう。

「きゃああっ!? な、何でここにっ……!」

これからいざ炊き出しをしようかというタイミングで、すぐ近くで悲鳴が上がった。

シュージが慌ててそちらに目を向けると、ホブゴブリンが1人の女性ににじり寄っていた。

その100メートルほど後ろでは、血相を変えた衛兵が走っている。

恐らく討ち漏らしが侵入してきてしまったのだろう。

「ギヒ……」

「や、やだっ、来ないでっ……」

「待てえっ!」

「ギヤ!?」

恐怖からか足をもつれさせて転んでしまった女性に対し、ホブゴブリンが下卑た目を向けて手を

伸ばしたところに、腰に提げていたガントレットを装備したシュージが割り込んだ。

「ゲギヤ！」

そんなシュージに対し、ホブゴブリンは持っていた棍棒を躊躇なく振り下ろす。

「ふんっ!」

「ギヤッ!?」

だが、シュージはそれを左のガントレットでガンツと弾くと、体勢を崩したホブゴブリンに向かって大きく一歩踏み込んだ。

「おおおっ!!」

ドゴオオツ!!

「ゲギヤアアア!?」

そんな踏み込みから放たれたのは、シュージの必殺技である右ストレート。

それがホブゴブリンに命中すると、拳がぶつかっただとは思えないくらいの凄まじい激突音が鳴り響き、ホブゴブリンの骨や肉を粉碎して、数十メートルほど吹き飛ばした。

「おお……」

その威力にシュージも驚く。

ジンバやミノリが言っていたように、装備に組み込まれた魔法により、パンチの威力が強化されていたのだ。

恐らくは身体強化系の魔法だと思うが、こんなにも変わるものかと改めて魔法の凄さを実感するシュージだった。

「あっ、大丈夫でしたか？」

「は、はいっ！ 助けてくださり、ありがとうございます」

「いえいえ」

「お兄さん、強いねえ！」

「かつこよかつたよ！」

「はは、ありがとうございます」

突然の魔物の襲撃にパニックになりかけた女性陣だったが、シュージの活躍によって安心してくれたようだった。

その後、慌てて来た衛兵達に感謝され、「二度とないようにする」と宣言されたので、恐らくもう大丈夫だろうとシュージは考えた。

「よし、気を取り直して炊き出しの準備をしていきましょう」

それからシュージ達は、大量の炊き出しを用意して、戦いを終えた者達に振る舞っていく。

尚、おにぎりも豚汁も食べやすくてとても美味しいこともあって、冒険者も衛兵もしつかりと英気を養えたのであった。



「皆さん、お疲れ様でしたー！」

キリカの音頭で、蒼天の風の食堂に集まったメンバー達は、隣にいる者とそれぞれ乾杯をしていった。

スタンピードが発生してから3日。

ついにスタンピードは収束し、街には平和が戻った。

先程まで冒険者達は荒れた戦場をできる範囲で綺麗にし、シュージや裏方のメンバーは色々と機材や道具の片付けに勤しんでいた。

作業が終わる頃にはすっかり夜で、今は全員がギルドに戻ってきて、食堂に集まっていた。

そんなメンバーには今日、炊き出しで振る舞われた炊き込みご飯のおにぎりと、卵スープが提供されている。

炊き出しで作った分は、スタンピードが想像以上に早く収束したため余ってしまい、色んな家庭やギルドにお裾分けをし、それでもなおかなり余っていたので、こうしてシュージが持つて帰ってきた次第だ。

ちなみに、蒼天の風のメンバーは最後まで戦っていたり持ち場にいたりしたため、まだ誰もこのご飯を食べていなかった。

「美味え！ ライスに味が付いてる！」

「美味しいー！」

最初に飛び付いたのはまだまだ育ち盛りのガルとピユイで、幸せそうに大きなおにぎりを頬張っている。

他のメンバー、特に戦闘をしていたメンバーもこぞって手を伸ばして、空いたお腹に美味しいおにぎりを詰め込んでいく。

「シュージ、ご苦労だったな」

そんな中、ジルバートがシュージに辛い^{辛い}の声をかけてきた。

「いえいえ、ジルさんこそ。寝る時以外ほとんど戦っていましたよね？」

「まあ、あれぐらいなら何とでもなるさ。シュージは怪我などはないか？」

「はい。最後に少しだけ手伝いましたが、特に問題なかったですよ」

そう、最終日の防衛に当たって、実はシュージも1時間ほどだが戦いに加わっていた。

というのも、一部の戦線が怪我人などで人手不足になってしまったのだ。

そのため、好きではないとはいえ、戦えるのに戦わないのも違うと思ったシュージは、前線に出ることにした。

気持ちの切り替えは地球で格闘技をやっていた頃から行っていたので、いざ戦うとなっても特に問題にならなかった。

結果、シュージはその戦線で八面六臂^{はちめんろくべい}の活躍を見せ、前線を見事に押し返すことに成功する。

その戦う様は周りにいた冒険者達からするとまさに鬼神のようだった。

そもそも、この世界で素手のみで戦う者というのは、いないわけではないが珍しいのだ。

魔物は中々に打たれ強い個体が多く、素手で仕留め切るのは難しい。

だが、シュージは強力なパンチやキック、時には絞め技なんかも使って魔物をバツバツと雑ざ倒していき、その様子が話題になった。

「お前の協力もあり、今回のスタンピードはこちらの死者数0という類を見ない結果になった。本当にありがとう」

「僕だけじゃないですよ。この街にいる全ての人のおかげです」

「そうだな。ただ、戦った皆から炊き出しはとて絶賛されていたぞ。やはり戦^{いく}で美味^{うま}いものを食べるのは中々難しいが、今回は毎食違うものが腹一杯食べられたから、士気がとても上がっていた。もちろん、俺達の士気もな」

「それは良かったです」

シュージの作る炊き出しは、おにぎりだったりパンだったり主食を変えながら、スープも色々変化させたので、戦う者達からしたら毎食が楽しみになるくらい豪華な内容だった。

「これを食べたら今日はもう早めに休もう。事務処理はこの街の行政部がするし、明日は戦った者達はゆっくり休んでいいとお触れも出てるしな」

「そうなんですね。そうしたら、明日は祝勝パーティーでもしましょうか」

「ほう、それはいいな。だがシュージも疲れていないか？」

「いえいえ。僕はほぼ食事を作っていただけですし、魔物と戦ったのも、布団を干したぐらいの疲労感で済みましたから」

「ふっ、流石だな。では、頼むぞ。食費は全てギルドから出すから、豪華なものにしてやってくれ」

「おお、太っ腹ですね。分かりました、明日朝一で色々買ってこようと思います」

ジルバートとシュージがそんな会話をしている間に、しっかりと腹ごしらえを済ませた蒼天の風のメンバーは、各自の部屋に戻っていった。

怪我は、前衛のガルやシャロ、ポリーなどがちよつとかすり傷を負ったくらいで、全員がほぼ無傷だった。

また、戦功はシュージが軽く耳にただけでも凄まじいもので、後日何かしらの形で称えられることになるそうだ。

ちなみに、シュージは他人事ひとごとのように思っているが、食事関係での功績が今回ちゃんと評価されていて、他のギルドの冒険者や衛兵からも「今回の食事は素晴らしかった」と表彰を後押しする声が上がっていた。

なので、シュージも大々的に表彰されることになるのだが、それはまた別のお話。



本日は気持ちの良い快晴。

気温はそこまで高くなく、湿度も低めなので、とても過ごしやすい日だ。

そんな今日はスタンピードから一夜明けた日でもあり、先程までシュージは買い物に出掛けた。いた。

冒険者や衛兵のほとんどが休んでいるため、街はいつもより人の流れが少なかったが、少し前までの張り詰めた雰囲気はなくなり、皆んな笑顔で過ごしていた。

そして今、シュージは蒼天の風の庭で色々準備をしている。

簡易テーブルと椅子を運び、ギルドの備品にあったバーベキューコンロのような道具を持ってきた。

そう、今日行うつもりなのは、豪華なバーベキューパーティーだ。

こちらの世界には外に出て皆んなで肉や野菜を焼いて楽しむという文化はなく、このコンロもバーベキュー用というわけではない。

というのも、この世界には車などがないので、コンロや食材、テントなどを川や広場に運んでいくことは大変な重労働だ。

また、そういった遊べる場所には何らかの屋台が出ていることが多いので、自分でわざわざ用意

しなくとも良い。

ただ、折角広い庭がギルドにはあることだし、その場で肉を食べただけ焼けるのは皆んな喜ぶと思うので、今回はバーベキューパーティーをすることにしたのだ。

「おーい、シュージ、火が点いたぞー」

「こっちも大丈夫よ」

「ありがとうございます、ガルさん、シャロさん」

そのパーティーの準備をガルとシャロが手伝ってくれていた。

「早く準備を終わらせれば、その分早く食べるからな！」

「そうね。お昼に豪華な食事があるって言われたから、朝もあんまり食べてないし」

「はは、では早いところ準備しましょ」

今回、シュージはそれも大量の食材を用意していた。

魔物の肉——オーク肉、グレートバッファロー肉、ビッグコッコの肉のいつもはちよつと高くても買わない希少部位、ボールシープという羊に似た魔物の肉で作った大きなソーセージや肉厚のベーコン、コッコの肉を焼き鳥用に下ごしらえしたものなどだ。

さらに、キノコやニードルキャロット、オニオニオンなどの野菜も用意し、ライスも沢山炊いておいたので、お腹を空かせた大食漢達も満足してくれるだろう。

そうこうしていると、ギルドメンバーが続々とやってきた。

テーブルに並べられた豪華な食材を見て、皆んなが感嘆の声を漏らす。

「今日はスタンピードの対処、お疲れ様でしたということで、バーベキューパーティーです。皆さん、好きなものを好きなだけこちらのコンロで焼いて食べてください。味付け用の焼肉のタレやレモンなどもこちらに用意していますので、お好みのものをどうぞ」

シュージがそう言うと、5台くらい置かれたコンロに皆んな群がって、思い思いのものを焼き始めた。

最初はやっぱり肉を中心に焼くので、辺りには肉の焼ける良い匂いが広がる。

「おっにつくっ♪ おっにつくっ♪」

「……ピユイ、まだ焼けてない」

「むー、早く焼けないかなー？」

そんな庭の一角で丁寧^{ていねい}に肉を焼くボリーの横で、ピユイがウキウキとした様子でコンロの周りをぐるぐる回っていた。

肉を焼く者が多い中、アイテム士の青年——シドは野菜を焼いていた。

それを見たキリカは、野菜も美味しそうだなーと思って口を開く。

「あれ、シドさん、最初に野菜ですか？」

「あ、はい……僕は胃が弱いので、食事の時は野菜から食べると良いってシュージさんにこの前言われて……」

「なるほど。私も後で焼こーっと」

シャロがメイに声をかける。

「あ、メイちゃん。コンロが高いから、私が焼いてあげるわ」

「ありがとうございます、シャロ様」

「シャロ、ついでに私のも焼いてくださる？」

アンネリーゼの言葉で、シャロは追加の肉を焼き始めた。

「しょうがないわねー。まあ、獣人はお肉を焼くのが得意だから任せなさい」

やはり、自分で好きなものを焼けるというのは新鮮なのか、皆それぞれコンロを囲んで楽しそうにしていた。

それから少しすると、最初に載せたものに火が通り、各々が口に運び始めた。

「おお！ この肉美味えっ！」

「ガル兄、焼き加減完璧だな！」

「だろ？ ほら、カインもこれ焼けたぞ」

「ありがと、ガルさん。……んっ、本当に美味しい！」

食べ盛りのリックとカインが、ガルに焼いてもらった肉を食べて目を輝かせながら美味いと叫ぶ。そのままどんどん次の分を焼き始めた。

細身で一昔前の中華風の男性——カグラ、それからイザベラ、グレースの大人組は、普段食べられないような部位の焼肉を楽しむ。

「んむ、何かグニグニしてるなこの肉？ でも、噛む度に旨みが出てきて美味いわ〜」

「それはミノっていうバツファローの胃の肉らしいねえ」

「内臓ってこんなに美味しいんですね？ ふふ、それにしても沢山食べれそうで幸せです」

ジンバトミノリは肉と共に大好きなお酒を堪能して、それはもう最高の気分になっていた。

「ごくっ……ぶはあっ！ いやー、酒もあつて最高だね！」

「そうじゃな。この焼き鳥も最高に酒に合う」

ゾラは従魔であるナイルとミニヤの分の肉も焼いている。

「ほら、ミニヤ、ナイル、焼けたよ」

それを食べたナイルとミニヤは鳴き声を上げたり、体を震わせたりして、美味しいことを伝えている。

「にゃー！」

「ガア」

「ふふ、そうか、美味しいか。……うん、確かに美味しいね。まだまだ焼いてあげよう」

「本当に豪華だな」

そんな豪華な焼肉パーティーをするきっかけとなったジルバートも、仲間達が喜んでいることを自分のことのように喜びながら肉を食べていた。

ジルバートの近くにいたシュージが反応する。

「はは、今日は比較的市場も空いていて、掘り出し物も沢山ありましたから」

「だが、これだけあっても全てなくなるだろうな」

「そうかもしれませんねえ。……あ、皆さん、ソーセージと特製スペアリブが焼けましたよー。いる方ー？」

「「「「いるー!!」」」」

やはり、頑張ったあとのご飯は何よりも美味しいもので、皆んな終始テンション高めでバーベキューパーティーを楽しむのであった。

第3話 誕生日パーティー

「シュージさん、ようこそ来てくださいました」

「ミリアさん、ご無沙汰してます」

本日シュージは、セネルブルグ辺境伯家を訪れていた。

というのも、依頼されていたシュミットの誕生日パーティーが明後日に迫っているのだ。

今日はその時に出す料理の最終確認や、当日の段取りの打ち合わせを行うためにここへ来たのである。

「本日は私がお付き添いますね」

シュージがセネルブルグ家に着くと、従者ではなく、辺境伯夫人——ミリアがすぐに出迎えてくれた。

「わざわざありがとうございます」

「いえいえ。祝われるシュミットをびつくりさせたいから、シュージさんが作る料理や当日の段取りは、なるべく周囲に伝わらないようにしたいの」

「はは、なるほど」

「では、まずは我が家のシェフ達の元へ行きましょう」

まずはセネルブルグ家の食堂に案内された。

そこにはコックコートを着た人達が10人ほどいて、その中でも比較的年上と思われる男性が一步前に出てきた。

「お初にお目にかかります、シュージ様。私はこの家のシェフ長を務めるムグラと申します」

ムグラがそう言ってスツと頭を下げると、後ろにいたシェフ達も頭を下げてきた。

「ご丁寧ありがとうございます。改めまして、シュージと申します。よろしくお願ひしますね」それに対してシュージも挨拶を返し、頭を下げた。

「あ、それと、僕に『様』は不要ですよ。普通の市民ですし、言葉もいつも通りで大丈夫です」

「では、シュージ殿と呼ばせてもらおう」

「はい、それで大丈夫です。そうしたら、早速料理についての打ち合わせをしましょうか」

今回作るメニューは既に伝えておいたので、シェフ達はある程度は練習をしてくれているようだ。

「それにしても、シュージ殿の渡してくれたレシピはどれも素晴らしいな。正直、外部の者にメニューを任せることへの心配があったのだが、全くの取り越し苦労だったよ」

「そう言ってもらえて良かったです」

「個人的にもご教授願いたいくらいだ」

「いえいえ、僕は多少この辺りでは知られてない料理を知ってるだけですから、料理の腕自体は皆さんとそこまで変わらないですよ」

「謙虚だな。……よし、それではお前達、一通りメニューにあったものを作っていくぞ。シュージ殿、料理の過程や味に問題があったら遠慮なく言ってくれ」

「分かりました、僕もお手伝いしますね」

それからムグラと他のシェフ達と一緒に、シュージは当日準備する予定の料理を一通り作っていく。

「あ、それはもう少しこんな感じで切ると綺麗に見えますよ」

「あつ、本当だ……ありがとうございます！」

「うーん、この食器だちょっと運ぶのが大変そうなので、こちらにしましょうか」

「はい！」

シュージはシェフ達に色々教えてたり相談をしたりしながら、料理を完成させていく。

さらに、まだ教えていなかったメニューもあったので、それも実践を踏まえて教える。

そうしていると、最初はシュージのことを侮^{あは}つていた者達も、見事な料理人としての技術と知識に感嘆し、素直に教えるを乞うようになっていった。

それからしばらくして、料理が完成した。

「これで一通り作れましたね」

「うむ、作り方の手順は分かったから、あとは当日、量を作るのに集中すれば良さそうだ」

今回作った分はここにいる者達で食べ切れる分だが、パーティーには100人ほどが出席するそうなので、この数倍は作らないといけない。

ただ、作るのが大変な料理は一部だけなので、何とかなるだろうとシュージは思っている。

その一部は、主にシュージが作るので問題はない。

今回作った料理は、この場にいるミリアとシェフに食べてもらう。

「まあ、美味しいですわ！ これならシュミットもきつと喜びますし、他のお客様にもきつと満足してもらえます！」

「ふむ、練習段階でも少し食べていたが、シュージ殿に教えてもらって一段と見た目も味も良くなったな」

「皆さんもとても良い腕ですよ。メニューを教えただけでここまで形にできていたのは、普段から腕を磨いてる証拠です」

シュージがそう褒めると、ムグラを始め、シェフ達はとても嬉しそうな表情を浮かべる。だからこそ、シュージは少し勿体なさを感じていた。

彼らの腕はシュージとそこまで大差ないはずなのに、この世界の食文化が発達していないせいで、その腕を持て余しているのだ。

ただ、今回のパーティーで、貴族や王族にこの料理が満足してもらえたら、シュージが今まで商業ギルドにレシピを登録して少しずつ広めていた食文化も、加速度的に広がっていくのではないかと思っている。

それほど、この世界における貴族の影響力というのは凄まじいものなのだ。

シュージがそんなことを考えていると、ムグラが思い出したように口を開く。

「あ、そうだ、シュージ殿。以前から頼まれていたこれも言われた通りに作ってみたのだが……」

「おお、これは……うん、いいですね！ かなり形になっています！」

「私達も試食したが、これは凄いものだと一口で分かった。きつと喜ばれるだろう」

「そうですね。これを使った料理を今回の目玉として提供しようと思っています」

食材の用意もつつがなく行われており、本番に向けて、最終確認に勤しむシュージだった。



—— ガヤガヤガヤ……

セネルブルグ家の城内にあるとても大きなダンスホール。

そこには現在、セネルブルグ辺境伯の一人娘である、シュミット・セネルブルグの誕生日パーティーに招かれた貴族達が入場している。

今回のパーティーは立食形式となっており、それぞれにお皿が渡され、ホールの中心部には料理の取り分けや説明を行うシェフ達が既にスタンバイしていた。

「おおっ！ 何だか見たことのない料理ばかりだ！」

「まあっ、とても綺麗ね！」

当然、貴族達は料理の方へと一直線に歩いていくのだが、そこには見たことのない料理が沢山並べられており、皆驚きの声を上げる。

立食パーティーの形式に決まった際に、まずシュージが考えたのは料理の食べやすさだ。

立食の状態ではナイフとフォークを使えない。

そこで、フォークですぐに食べられたり、爪楊枝や串を刺せたり、何なら手で食べられるような一口サイズの料理を主に用意した。

それはいわゆるフィンガーフードと呼ばれるもので、例えばカナッペという一口大に切ったパンやクラッカーにチーズや野菜、ハムなどを載せたものや、ミニロケットマトを半分に切り、その間にチーズやハムなどを挟んだものなどだ。

それらは見た目が華やかな仕上がりになっている。

他にも、ポテトやオニオンが入った一口大のオムレツに、ローストビーフを丸めて爪楊枝で留めたものなども並べられている。

皆んな早く食べてみたいと、料理から目が離せなくなっていた。

『皆様、本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。我がセネルブルグ家の方々の入場でございます』

参加者全員がホールに集まったところで、魔法で拡声された司会の声がホールに響き渡った。

それからすぐにホールの上座にあたる場所から、当主のゼレスト、妻のミリア、そして本日の主役である令嬢、シュミットが姿を見せた。

会場からは盛大な拍手が鳴り響き、皆んな笑顔でシュミットの誕生日を祝福する。

『本日は我が愛娘、シュミットの誕生日パーティーにお集まりいただき、心より感謝申し上げます。我が家のシェフ達が腕によりをかけた料理を用意いたしましたので、ぜひご堪能ください』

『皆様、本日は私、シュミットの祝いの場に集まってくいただき、ありがとうございます。こんなに大勢の方に祝われて、私はとても幸せでございます。どうか、私達のもてなしを楽しんでいってくだ

ださいね』

ゼレスト、そしてシュミットの挨拶が終わると、ホールは再び大きな拍手に包まれた。

それは形式的なものではなく、まだ12歳のシュミットが立派に貴族としての挨拶を行ったことによる感嘆からきたもので、彼女のことを同じ貴族として誇りに思う気持ちがホール内に広がっていった。

そんな挨拶が済み、貴族達はゼレストとシュミットの勧め通り、用意された食事に手をつけた。

『こ、これは美味しい！』

『何だこれは！ 食べたことないものばかりじゃないか！』

料理を食べた貴族達は、皆んな驚きを隠せない様子ですぐに虜になっていく。

それもそのはずで、見た目だけが華やかな料理はここにいる貴族達も食べた経験はあるが、今回のように味までも完璧な料理は初めてだったのだ。

しかも、香辛料や調味料をふんだんに使った濃厚な味付けではなく、どれも食材本来の自然な美味しさが口に広がるのだ。

食通だと自負していた高位の貴族達ですら、今までの料理は何だったのだろうと思ってしまうほど、今回用意された料理はどれも美味しいものだった。

『皆様、お食事のところ恐縮ですが、ここでフローリア第一王妃陛下、ルビィ第三王女殿下のご入場でございます』



しばらく貴族達が料理に舌鼓したつみを打っていると、魔法によって拡声された司会の音声が再びホールに響いた。

その言葉が終わると、来賓用の入場口から他の貴族達よりも一段と上のオーラを放つ青髪の美しい女性と、その女性によく似た可愛らしい赤髪の少女が、綺麗なドレスを身に纏ってゆつくりとホールに入ってきた。

貴族達は、近くのテーブルにお皿を置き、膝をつけて敬礼の姿勢を取った。

そして、今入場した女性は、セネルブルグ家の者達がいる場所へ歩いていくと、優雅にゼレスト達に向かって一礼し、言葉を発した。

「楽しんで構いません」

拡声の魔法はまだ使っていないはずだが、その声はやけにホールに響き、それを聞いた貴族達は立ち上がって改めて姿勢を正した。

『第一王妃のフローリア・レア・シルムーンでございます。本日はこのような素敵なパーティーにお招きいただき、感謝いたします。シュミット様、改めてお誕生日、おめでとうございます』

『だ、第三王女のルビィ・レア・シルムーンでしゅ！ あう……か、囁んじやった……あつ、し、シュミット様、お誕生日おめでとうございますっ！』

『祝いのお言葉、大変光栄でございます。王妃陛下、王女殿下』

第一王妃のフローリアと第三王女のルビィが祝いの言葉を述べると、シュミットは肅々と、ただ

少し嬉しさを感じさせる声色で言葉を返した。

『あまり長々とした挨拶も場が冷えてしまいますから、この辺りで。何やら、珍しい料理も見えま
すし、私達も楽しませていただきましょう』

そんな風にフロリアの言葉で挨拶が締め括られ、パーティーは再び先程までの賑わいを取り戻
すのであった。



「ほう、これは……とっても美味しいですわ」

「んんっ！ 美味しいですっ！」

現在、シュミットの誕生日パーティーの真つ最中。

本日の主役であるシュミットと同じテールでは、用意された食事をする、この国の第一王妃で
あるフロリアと第三王女であるルビイの姿があった。

立场上、これまで各国の様々な料理を食べてきたフロリアからしても、今回用意された料理は
目を見張るほど美味なものばかりだ。

まだ9歳のルビイは、キラキラと子供らしく目を輝かせながら、夢中で用意された料理を頬張っ
ている。

「こちらの料理は卵とオニオオンを使ったもので……」

シェフ長のムグラは料理を淀みなく説明している。

説明を聞いていたフロリアが尋ねる。

「この料理は貴方が考案したのかしら？」

「それは……」

これにはムグラも思わず口をつぐんでしまい、どう答えようかとゼレストの方をチラリと見た。

「王妃様、実はこの料理は市井の1人の料理人が考案したもののなのです」

それを見かねたゼレストは、フロリアとルビイだけに聞こえるよう、小声でシェージュのことを
伝えた。

「ただ、市井の者ですし、こういった場も初めてということで、本人の希望もあり今回は裏方で尽
力しているのです」

「ふむ……ここまで見たこともない美味な料理を作れる方とは一度お話ししたいと思つたのですが、
難しいでしょうか？ ルビイも気に入ったようですよ」

「むぐ？」

急に話を振られたルビイは口いっぱいに料理を頬張っていたところだった。

「あら、そんなに詰め込んで。ちよつとはしたくないですよ、ルビイ」

「……ごくつ。ご、ごめんなさいお母様……あまりにも美味しくて……」

「まあ、気持ちは分かるから許すわ。それで、どうでしょう、ゼレスト辺境伯？」

「分かりました。王妃陛下、王女殿下がお会いしたいと仰っていたと伝えはしてみます。ただ、本人が拒んだ場合、お咎めなどはしないようにお願いできますでしょうか」

「それはもちろん。約束しますわ」

実際、ゼレストはこうなるだろうと思っていたので、手早く近くのメイドにシュージに伝えるように伝言を託した。

「シュミットお姉様、とても綺麗です！」

「ふふ、ありがとうルビィ。お主もいつにも増して可愛いらしいの」

「えへへ……褒められちゃいました！」

そして、大人達の横ではシュミットとルビィの子供同士が仲良く話していた。

実はこの2人は前から交流があり、シュミットの可憐さと才女っぷりにルビィが憧れを抱いていて、お姉様と呼んでいるのだ。

もちろん、ルビィの方が立場的には上ではあるが、シュミットはルビィを可愛い妹のように大事に思っている。

ホール全体を見渡して、ゼレストが口を開く。

「ふむ、食事も粗方済んできたところかな。では、今日の目玉をお出ししよう。シェフ長、準備を」

「はっ！」

「あら、まだ何かあるのですか？」

「もちろんこれまでの料理も自信を持ってお出しできるものですが、これから出すものはさらに凄いですよ」

そう言うゼレストの言葉のすぐあとに、既に用意されていた料理がシェフ達によってホールに運ばれてきた。

「な、何、これは……！」

「綺麗……！ これ、本当に食べて良いのかしら？」

それは、一口サイズで、クリームや果物を使って可愛らしくデコレーションがされたデザートだった。

いちごのショートケーキ、プリン液を流し込んで焼き上げたタルト、ビスケットの上にクリームや小さなベリーがあしらわれたものなど、まるで芸術品のようなデザートが、10種類以上運ばれてきた。

「これは……言葉で表すのも難しいくらい美しいわ」

「綺麗です……！ それに、とっても甘い匂いがします！」

フロアリアとルビィもこれには驚き、感嘆の声を漏らす。

「父上、母上、これは……」

そして、聞かされていなかったデザートが登場に、シュミットも驚いていた。

「はは、今回の目玉として、シュミットにも喜んでもらいたかったから、デザートに関しては内緒にしていたんだ」

「これは驚いたぞ……全く、あいつは本当に底が知れんの……」

これを作ったであろう、ムキムキの料理人の姿を思い出し、笑みが溢れる。

そんなシュミット達を横目に、貴族達は早速思い思いのデザートを手に取り、ゆつくりと口に運んでいった。

「はあっ……何て美味しいの……♡」

「甘いのに、胸焼けしない……これは凄いぞ！」

その反応は先程料理を食べていた時にも引けを取らず、むしろ女性陣に関してはそれよりも良い反応を見せていた。

男性陣に関しては、普段パーティーで出てくる甘味は仕方なく口にして、そのあまりの甘さに胸焼けと戦う羽目になるという定番の流れがあったのだが、今回のデザートにはそれが起こらなかった。

というのも、今回のデザートは砂糖は必要最低限の量に留め、あくまでも果物や牛乳などの素材本来の甘さを生かした作り方をされているからだ。

一口サイズということもあって、何個でもいけそうな食べやすさがあった。

「まあっ……！！これは素晴らしいですわ……！！」

「んんっ♡甘くて美味しいですっ♡」

フローリアとルビイも甘いものは好物なので、デザートにメロメロになっている。

「ああ、美味しい……♡」

もちろんシュミットも、その美味しさには感動していて、ゼレストとミリア、そしてシュージのサプライズは成功した。

「あら、また何か運ばれてきましたわ！」

「おお、これまた美しい……」

だが、実はもう一つ、本日の大目玉が残っていた。

デザートとはまた別に貴族達の元へと運ばれてきたのは、大きなお皿に並べられた一口サイズの四角い板状の食べ物達。

それは白、茶色、焦げ茶色の3色があり、それぞれがまるで一枚の板のように綺麗に並べられていた。

そしてもう一つ、シュミット達セルブルグ家の者達とフローリアとルビイの元へと運ばれたのは、クリームで彩られたとても大きなケーキだ。

『皆様、こちらは我が領地で最近収穫されたカカオという豆を加工した、チョコレートという甘味でございます』

そうゼレストが説明した通り、今回シュージが用意した新作にして目玉の料理は、チョコレートだった。

これは初めてセネルブルグ家を訪れた際に倉庫で見つけたもので、その時はまだ色々と処理が足りなかったのか、形は良くても味はひたすら苦しいし、舌触りも悪くてとてもじゃないが食べられるものではなかった。

ただ、シュージには、カカオからチョコを作った経験があった。

前世で働いていた食堂の自作好きの店長が、チョコも自作しようと言いつけ出したことが切っ掛けだ。その際、意気揚々と作り出したのはいいものの、専用の機械がない状態だと非常に手間も時間もかかり、一応市販のものと大差ないくらい美味しいチョコレートは出来たのだが、あまりにも手間なので、結局メニユーに入れるのは泣く泣く断念したという過去がある。

だが、今回はその経験が生き、カカオを生産しているという村の者達に詳しい作り方を教え、ムグラなどと協力してかなり急ピッチだが完成まで漕ぎ着けたのだ。

『そしてシュミット、誕生日おめでとう。このチョコレートケーキは、今回の誕生日の祝いとして、世界で初めて君に食べてもらいたい』

「父上……」

先程の料理もそうだが、この展開もゼレストが考えたサプライズで、スッと横から現れたメイドが、大きなチョコレートケーキを一切れ切り分け、シュミットの元へ持ってくる。

そんなケーキを、周りの貴族達が見守る中、シュミットはゆつくりと口に運んだ。

「では……んんっ!? こ、これはっ……美味し過ぎるのじゃ……♡!」

シュミットが幸せそうな表情でそう言った途端、ホールからは喝采が湧き起こり、改めてシュミットの誕生日をみんなが祝う。

『喜んでもらえて良かった。このチョコレートは、我が領の新たな名物となるだろう! 皆さんもぜひご賞味ください』

ゼレストがそう言うと、貴族達も並べられたホワイトチョコレート、ミルクチョコレート、ビターチョコレートをそれぞれ口に運んでいく。

「ああっ……口の中でとろける……♡ 何て幸せな甘さなの……♡」

「こっちの黒めのチョコレートは苦味が強くて、白い方は甘味が強い……どれも違った美味しさがあるな!」

そうしてチョコレートを口に運んだ貴族達は、すぐにその美味しさにノックアウトされた。

「これは良いものですね……間違いなく、今まで食べてきた甘味の中で、最上級と言えるでしょう!」

「これ、凄く美味しいです♡!」

それは王族であるフローリアとルビィも例外ではなく、噛み締めるように大事にケーキを頬張っていた。

立ち読みサンプル
はここまで

『今回、こうして提供したチョコレートですが、量産の目処も立っておりますので、間もなく販売できると思います。それに、制作者の意向で、更なる味や種類の開発も進めていきますので、楽しみにしてください。本日はお帰りの際に手土産として、そちらのホワイト、ミルク、ビターチョコレートの詰め合わせを保冷機能のついた箱に入れてお渡します。皆様の家に帰ってからどうぞご家族とお楽しみください』

そんな大盤振る舞いなゼレストの言葉に、貴族達は色めき立ち、再びホール内は拍手に包まれるのであった。

◇ ◇ ◇

「ふう……」

所変わって、ここはセネルブルグ家の厨房。

先程までケーキ作りに勤しんでいたシュージは、座って一息ついていた。

一応、ケーキ作りの経験はそれなりにあるものの、本職のパティシエというわけではないので、今回は神経を使った。

ただ、個人的に練習やイメージトレーニングをしておかげで、納得いくものが作れ、一安心していた。

「シュージさん、お疲れ様です！」

「あとは片付けくらいなので、私達にお任せください！」

「ありがとうございます、皆さん」

そんな少し疲れた様子のシュージに、周りにいたシェフ達は気を遣ってくれ、その言葉に甘えてシュージは少し休むことにした。

「シュージ様」

そこへ1人のメイドが近づいてきた。

そのメイドはシュージだけに聞こえるように近くに寄り、小声で話す。

「今から1時間ほどあとの話なのですが、王妃様、並びに王女様がシュージ様との面会を希望しています。断っても罰したりは絶対にならないそうなのですが、いかがなさいますか？」

「王妃様方がですか？」

「はい。シュージ様の作った料理にいたく感動されたようで……」

「なるほど……分かりました。お会いさせていただきますとお伝えください」

「かしこまりました」

どうやら、もう少しシュージの仕事は続くようだ。

◇ ◇ ◇

シュミットの誕生日パーティーも大成功に終わり、招待された貴族達が満足感あふれる表情で帰